

時代小説
自選集
第九卷

逢魔の辻

大佛次郎

大佛次郎時代小説自選集

第九卷

逢魔の辻

昭和四十五年九月十日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号一〇四 東京都中央区銀座三の二の一
五三〇 大阪市北区野崎町七七
八〇二 北九州市小倉区明和町一の一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

逢
魔
の
辻

莖丁・題簽
見返し繪
佐多芳郎
中村岳陵

黒^{くろ}南^{なん}風^{ふう}

一

この梅雨^{つゆ}時の空の、明るく濃い風色は美しい。伊豆の島から赦免^{しやめん}になって江戸へ帰る囚人^{しゆじん}たちを乗せて来た船が長い旅路を終えて、隅田川の河口へ入って来たのはもう暮れ方だったが、お浜御殿^{おはみごてん}の森の上にあたる西の空に少しばかり雲が切れ、入日の強い光が急に射して来たので、舟の上では一せいに声を揚げて悦んだ。いよいよ着いた。ここで俺たちはもう一度自由な体になる。水の上に近寄って来たなつかしい江戸の町の眺めを見まもりながら、誰もたまらなく、この思いを抑えていた場合だったせいもあるう。

「やあ、有難い！」

「天気だ！」

役人たちまでが仏顔に見えた。河口の洲に繁っている芦の若葉が影を長く水に映している。その向うに見える森も、むくむくと青葉を重ねているのが、風色の空に盛り上って、一段と目も醒めるように鮮かに見える。そこには朱い鳥居があった。あぜ道を人が歩いていて。いや、もう左手の河岸にはぎっしりと立てこんだ

人家が建ち並んでいて、障子のあいている窓に人が覗いているのが見えれば、用もなげに石崖^{いしかが}の上に立つて、こちらを眺めている町の者の姿も見えた。

とりわけて、河岸通りを歩いている夏姿の女たちの着物の色や素足の白さが囚人達の眼を鋭く刺戟する。役人の監視がなかったら、声を揚げて合図してこちらを向かせて見たいところだ。

「すっかり、風の匂いまで変ったぜ。人臭いというのが、こいつだ」

「まったくだ。妙に、うずうずして来るぜ。いいなあ、やっぱり生れ故郷だ。もう永代だろう」

「おれア七年振りだ。冗談じゃあねえ。七年振りでお目にかかるって奴よ。そいつも、まああのまま島の土になることを考えれば、これから先は拾ったものと見てもいいが……ど、どんな風に変つていやがるかなあ。何だか、こう、手前から先に、まごまごしそうでいけねえ。誰か迎いに来ているかなあ。まさか、不人情においらのことを忘れてしまったのじゃあなからうなあ」

「冗談いっちゃいけねえ。五年や七年で忘れるものか。それアお前のところへも迎えが出ているだろう。おいおい、長さん、それア俺の行李だぜ」

「違えねえ。おいらのは、こっちだ。まごまごしなさんなっているんだ」

「まごまごしたのは手前だろう。もう永代だろうな。ああ、こっちの河岸は、佃島^{ふたばし}だな」

「おや、誰だい、寝ているのは」

「寝ているって？ ああ呆れたね。金さんだ！ 舟が着くつていうのに、この人は高野だ。金さん、金さん！」

「舟に酔ったんじゃないか……」

「いや、舟には強いひとだ。暢気に寝ているんですよ。おい、金さん。もう着きますぞ」

七人いた囚人の中でただ一人、この男だけが、武士だった。赦されて帰ることになって、めいめいが身寄から送って貰った新しい着物に晴々と着替えた中に、二年前に島に送られて来た時の古い袴を着て、それも両刀は取り上げられているから丸腰で無造作に舟へ乗込んで来たのが目立った男である。

「金さん」

「煩せえな。何だ？」

首も起きないで、目だけ開けた顔が、島の日に焦けて浅黒かったが、若くて悍ましい。赦免の書付に書入れてあった年は確か二十三歳だった。身分のある家の息子と聞いたが、美男の上に、どこなく品がいい。

「煩せえじゃあない、そら、もう永代が見えて来たんだ」

若者は寝たまま、帆の上に雲が欠けて覗いた青空に目をとめて答えた。

「何だ？ 天気になったのか？」

別の方角から笑い声を漏らしていい出した者がある。

「ははははは……お前たち。島にいる間は別だろうが、こっちへ帰って来て、金さん呼ばりは失礼だろうぜ。ええ。もう金さんじゃねえ、れっきとしたお侍の青江金五郎様だ。滅多な真似をして、無礼者それへなおれとやられたら、まったく話はそれきりなんだ。粗相のないように、気をつけなけれアいけねえ。ははははははは青江さん。それで御座いますね。島じゃ大層御苦勞をなすつたが、これで永代へ上陸って、みんな、じゃアおさらばだということになると、青江さんはお侍、長さん、お前は、……」

肉の厚い顎をしゃくって、

「堅氣で行くとなると、稼業は何だっけ？」

「違えねえ。手前が忘れていたって奴だ。へえ、何でも宜しゅう御座ります。生憎と、もとの店なんて、とっくにしまいましたからね。おまんまさえ頂ければだ。とにかく、これから探そうっていうんだ。成程ねえ、御赦免になったのは有難いが、早速、そいつが苦勞だ。まあ、どうにかなりましようって申したいところだが……」

ぎょろりと素速しこい眼が、役人たちのいる胴の間の方へ走ったが、狡猾そうに首をすくめて、

「へえ、御達示はよくわかりました。生れ変ったつもりでせいぜい実直に、堅氣に致すことで、他人さまのものなどには、向後決して手を出すようなことは致しません。夢々御座りませぬ。隣りで手桶をしまい忘れて、井戸の流しに置いて御座いまして、も

もし手桶が出ていますよって親切に知らしてやることで御座ります。へい。とりわけて観音さまのお堂の樋などは、外れかけておりまして、拾って売ろうなことは致しませぬ」

「初耳だぜ。けちな野郎だ。お前、観音さまの樋まで盗んで売ったのか？」

「どう致しまして。これは友達の話で御座います」

「そうよ」と、側から口を出した者がある。

「こいつは、もっと大きい仕事を致しましたよ。加納屋さん」

「あ、余計なことを喋るな、余計なことを」

「いいや、手前、いつか、手前の口から話したじゃねえか、はははははは」

「いや、そいつだけは言ってくれるな。そいつだけは」

加納屋といわれた、芝の方の顔役で、島でも羽振りのよかった男は鷹揚に笑いながら尋ねた。

「何をしたんだい？」

「へい、長次の奴はね」

「よせ、よせったら、こいつ！」

いわけまいと組みついて行くのを、刺青のある強い腕で抑えつけて、ふき出しそうになって笑いかけた顔付でいい出した。

「こいつは……」

「よ、よせ！」

「じたばたするな、悪党らしくもねえ。こいつはね、……新宿の閻魔さんが首へ掛けていた子供の着物を盗んで来て手前の餓鬼に

着せたんで御座います。正月の晴着に」

「畜生！ 畜生！」

どつと笑いどよめいた。もう睡気もさめてこの話を聞いていた金さんといわれた侍が、長次という男の顔を見まもりながら起きなおったが、その途端に舟の左手の河岸の方から突然に聞こえて来た大勢の人間の叫び声に何事かと驚いて振返って見た。

その、わーっとどよめく声は、もう翳って薄暗くなった佃の寄場の塀の上から首を出して、この船の来るのを見つけた人足たちが、一せいに叫び上げたものである。

「親玉ッ」

「石川五右衛門！」

「大ぬす人。熊坂長範はだし！」

「一万両！」

島から帰った船と見て、同じ籠の鳥の囚われ人が遠くから一度に送った誉め言葉なのである。

「御金蔵破り！ 御立派で御座りませう」

三

胴の間にいた役人たちが狼狽して立ち上るのが見えた。水を隔てている分には、寄場の塀の上では一向に驚かない。反って自分たちの声がとどいたと知って、湧き立ったのである。

「でかいぞオ！ 大友の黒主！」

「石川五右衛門！」

「怪しからぬ！ 寄場役人は何をしているのだ？」

同心の一人が、こう叫んだのに応えるようにすぐ背後から突然に、

「ははははは……」

と笑い声を揚げた者がある。他の囚人も笑い声が自分達の席から起ったのに驚いて振返ったのである。同心は、きつとして向きなおって、青江金五郎が目に涙をためて笑っているのを見つけると、凄じい顔付で睨み据えた。

「何が、可笑しい？」

笑い声は消えていたが、にやりとして傍を向いた。

「何が、可笑しい？」

答えない。見上げている目が、笑いの影こそ消したが、びくともしない不敵のものだった。若いというのは素晴らしい。黙ってじっとしていても、それだけで何かしら力の充実した感じを人に与えるのだ。

「え？ 何が可笑しかったのだ？」

「まあまあ！ 旦那」

と側から、加納屋が取做すように詫言を入れた。

「どうも、まことに。……」

「そうなんです。一体、このひとは、いつもから笑いっぱいで」

と長次も首を伸ばした。ほかの同心も撫めたので、それ以上はいわなかったが、寄場の人数が今になって役人に追い散らされた

らしく急に先を争って首をひつ込めて見えなくなると、もう一度金五郎の方を睨みつけて、もとの席へ坐った。

「おい」

「……………」

「よく俺の顔を覚えて置け。どうせ、その内、またお白洲で面を突き合せることがあるだろう。俺ア一度、これと思ったら決して物忘れをしない男さ。いいか、手前の方でも忘れねえように、俺の顔をよく覚えて置け」

言葉にこもっている毒が、はっきりと伝わった。若者はほかの者に見られているので、顔色は平気らしくしているが、流石に頬のあたりに微に動いた陰影があった。ほかの人たちも、誰も物をいわず、変にしーんとしている。之から新しく世間へ出なおそうという門出の時に、他人事だが、あまり好い言葉とは聞こえなかったせいもあるう。いや、それよりも、この同心にもとから見覚えのあった者は島で仲間だったこの若者の前途のために甚だ気の毒なことと胸の中で思っていたのに違いない。この蟻崎という同心に睨まれたら決してよいことはないという話が、誰い出すともなく伝わって、多少なり後暗いところのある者は、皆、憚っていたからである。

しかし、それも、結局、自分たちには関係のないことなのだ。

船が丁度、永代橋に近づいて、潮風をはらんでいた帆をおろすと一緒に、もう夕焼の色こそ消えていたが、まだ明るい橋の欄干に雀のように並んでこちらを眺めている人出に気がついて、一度に

その方を見上げていた。

「あ！ 迎いに来ているな」と加納屋が顔を輝かした。

「ほう、これア……」

提灯を欄干から差出している者さえあった。それよりも茶屋の女将や、若い女たちの艶めかしい姿が加わって熱心に覗いているのが、顔役の加納屋らしい派手な出迎いだっただけだ。

「やあ、お前さんたちの身内の衆も、きつと来ていなさるぜ。まずまず、これで、……いや、俺たちだけでも景氣よく手をしめたいところだ」

四

陸には廂と廂とが迫った町に夏の宵闇が降りていた。嫁入りでもあるように提灯がそこに群がっている。

「お目出とうござんした」

「親分、お目出とうございます」

「お帰りなさいまし。親分。お久しぶりでござんす。御苦労さまでございます」

でつぶりした加納屋の明るい顔が中心になっている。この混雑に追いやられた片隅に同じ島婦りの者が家族らしいものと、ひそひそと、だが、嬉しげに話している。働く男を島に取られていたせいか、これはさすがに服装もみすばらしい。帰って見れば、島の仲間にも直に浮世の盛衰の差別が現れるものだった。迎えの駕籠も通りを塞いでいた。遠くから物見高く見に集まって来た者

もある。

「まあ、一杯やろう。江戸の酒も久し振りだ」

その前からその舟宿の女将が愛想を振りまいて、二階に支度が出来ていると繰返していた。加納屋は、島の仲間のことをもう忘れたようである。羽織と呼ばれる土地の芸妓の姐さん株らしいのと笑って何か話し乍ら景氣よく梯子を二階へ昇って行った。他の者が、それについて、ぞろぞろと昇って行くのだ。二階の障子は灯に明るく、聴てそこに影法師が映り笑いとよく声が聞こえるようになる、外の見物人も暗い町に散らばりはじめていた。

青江金五郎が、その中にいた。金五郎はひとりである。誰も迎えに出ていなかったのだ。

(来ているかな?)

と思つたのは、来そうもないと予期していたからだ。落胆もしない。それよりも、今こそ自分が、放たれて自由になったということだ。その悦びだけで一杯なのだ。とうとう俺は帰って来た！ それと、この町というものは、何と、目まぐるしく、雑多なものを含んでいることだろう！ ぎっしりと建ち並んだ家もそれだ。歩いている人もそれだ。いや、第一に、この深々と吸う空気に、なんと、さまざまな物の匂いがこもっていることだろう。時分時だけに、夕食の魚を焼く匂いがする。それから川の水が匂った。新しい野菜の匂いがした。歩いて前を通ると、どの人家の窓からも、その家に特有の匂いがした。すれ違う女は女の匂いをさせた。そういうよりほかはない、女の匂いだ。髪の毛や白粉

や、汗をかいた肌の匂いの雑然と入り交ったものだ。

島で潮風だけを嗅いで暮して来た後で、確かに、まごついてしまふくらいなのだ。いろいろの楽器が一度に鳴り出したのを聞くようなものだ。——ぼかんとしてしまふ。ただその底から浪のようにうねり上って来る幅の広い感情がある。

（帰って来た！俺は）

こいつである。若い心は楽しかった、何となくいきいきとして、脚まで知らぬ間に駆け出そうとするように速くなる。踏んでいる地面の土からして島のものとは違った。そうなのだ。これは百年も二百年も昔から、毎日毎日朝夕に人の足に踏みならされた土なのだ。気がつかぬ間に人の体温がつたわり呼吸が通じ、丁度人の家で大切にして使いならした古い道具のように、無理もなく馴染んで、人間になつかしく出来ている土なのだ。

若い心は、物に感じ易い。ほろりとした心持さえ誘われるようだった。目の前に大川の水が流れている。向う河岸は梅雨空の下にぎっしりと建ち並んだ家だ。燈火の影が星のようにちかちかして、水にも明るい影が揺れ動いている。金五郎は、橋を渡りかけた。ふいと、

「あら、金さんじゃない？」と、明るい女の声が、そう離れていないところから呼びかけた。

五

宵闇の中に、白い面輪が泛んで笑っている。橋の上にはかなり

強く風が吹いている。女は裾を取られまいとして片手で膝のあたりを抑えながら、そそくさと近寄って来るのだが、抑えきれない喜びに顔を明るくしていた。

「金さんでしょう」

金五郎は、ああ、といった。

「誰かと思った。お力さんか」

「覚えていてくれた？」

言葉が、それだけで途切れた。ただ黒い瞳がまじまじと見詰めている。その形を、はつきりと切れた大きな目が昔からこの娘の顔の特徴だったが、こんな風に真向から力強く見詰められたことはなかった。眩しいものを見せられたように金五郎は、目をばちばちやった。

「おひとり？」

「ああ……」

「お屋敷の方から、どなたも迎えにいらっしやらないんですの」

「来ない」と、いつて、話をほかの方角へ持って行つた。

「大きくなつたじゃないか？……人違いするところだった」

「あら」と笑つて、

「誰と？」

「いいや、お力さんじゃなろうと思つたんだよ。俺の知ってお力さんは、もつと小っぱけで可愛らしかった……」

「知っていますよ。にくらしくなつたって仰有るんでしよう——でも、お目出とう御座いました。あたし、金さんが帰って来るっ

て聞いて、また、だまされるのかと思いましたわ」

「誰に聞いたんだ？」

「蔵前の六ちゃん。それ、碇床いかしどの」

「……………」

「あたし、……嘘だっかってやってやったの。六ちゃん、意地が悪いわ。ほんとうに出来なけれア、なぜ、顔を赧かたじけなくするんだっていうんだもの。それから、もっと、いろんなことをいって、からかうの。あたし、ほんとうに赧かたじけなくなったらしいのね」

「……………」

「でも、すぐに、ほんとうか嘘か尋たずきに定廻りの柴田さんを探しに行ったわ。柴田さん、親切だわ。聞いて置いてやるって仰おほ有うって、……」

「あいつは、……まだ、いるのか？」

金五郎は、頭の中に泛はんだ忌まわしい思い出に苦り切った。その定廻りの同心で、柴田という色白の、役者の誰かに顔が似ているという評判を自分も得意にしていた男が、金五郎を島に送ったのだ。いつも会えば友達のように口をきくし、こちらから酒を飲ませるのが当然のような顔をしていた奴が、不意と人間が変ったように平気で金五郎を裏切ったのだ。——交際はつきあいだ、俺アお上の御用で働いているのだ。俺の顔も立てて貰もらいてえ。恰好だけつけるんだから、一緒に来てくれ。冗談のようにそういったのがきっかけで。

「お力さん。……余計なことのようだが、お前なんか、あんな

人間に口をきくことはないんだぜ。あいつらは、人間の皮を着たけだものだと思って、側へ寄らないがいい。これアまったくの話だ」

「だって、お前さんのことを聞くのに」

「いや、俺のことなんか」

六

不意と、すぐ背後から、ほかの男の声が割込んで来た。何をいったのか聞き取る前に、金五郎に出会い頭に突き当たったように、薄気味悪く笑っている蠣崎新吾の顔と目を見合していた。

「大分、話がもてるようじゃないか」

「……………」

「ええ？」

化石したように無言になっている金五郎の顔を見据えた目は、すぐにお力の方へ走った。

「別嬪べっぴんだね？」

「……………」

「どこの娘だ？」

お力には、これが気味が悪かったのだ。すぐむようにして金五郎の蔭に隠れようとした。

「知り合いの者です」と、已むを得ず庇かばうようにして金五郎が答えた。

「知り合い？ どういう知り合いか、知らん。が、俺の尋たずいてるのは、どこの娘で親は誰だと聞いているのだ」

稼業柄という。相手の顔を見据えると、光ったまま、いつまでも動かずにいるのが特徴の目だった。返事を躊躇^{ためら}っていたら、すぐに畳み込んで来た。

「話は聞いていたぜ」

「……………」

「そうとも、そっくり聞いた。お上の御慈悲で野放しになったと思うと、いい気になりやがって……なんだ？ あの手合とは近寄るなッ？」

「……………」

「聞こえねえと思って、利いた風な口をきくな。手前の方で逃げようとしたって、こっちから御懇意に願って出て行くんだからよく覚えて置け。俺の口からそういったら、決して間違いないことだ。よほど、島が気に入ったようだから、その内、また送つてやろうじゃないか？ だが、これアどこの娘なのだ？」

黙っていれば果しなく意地悪くなると判っている相手のことだから、有りのままに答えるよりほかはない。

「三味線堀の五右衛門店におります仁兵衛と申す者の娘です」

「親爺は何をしているんだ？」

「もとは研師^{とぎし}で御座います」

「もとのことを尋いていやしない」

「今は何も致しておりません」

「へえ、何もしないで調法に飯を食べるものかね。いや、おまんまより、その娘をよくじゃらじゃらさせて置けるな。おい、人の

目を節穴だと思っちゃいけねえ。三味線堀の仁兵衛なら、俺ともまんざら他人じゃアねえ。二度三度、暗いところへ行つて大層顔の売れている奴だ。もとは研師とは話が正直過ぎる」

「……………」

「そうか、お前の出迎えは、三味線堀の仁兵衛の娘か？ 似合いの夫婦だ。どうせ当分のことだから、せいぜい可愛がってやつて置け。にくまれ口だと思つたら間違うぞ。その内、迎えを出すぜ。忘れるな」

「蠣崎さん」と金五郎は、初めて、燃えるような目の色で相手を睨んでいった。

「無駄だと思いが、今から礼を言つて置きましょう」

「なにッ？」

「俺がお前さんの註文どおり悪党になったら、その時は、お前さんの手に負えまいというのさ」

花 菖 蒲

一

提灯を持った中間が、主について門を入ると、
「お帰り」と、よくとおる声で叫んだ。

屋敷町の夜の静けさである。門内は暗かったが、玄関の障子に灯の影がさした。主の若い武士が草履を揃えて脱いで式台上る前に、障子は開き、手燭の光は、この雨の季節の前栽の葉もつやつやと黒い繁みに映っていた。屋根の樋のあたりに青いのは端午の節句の菖蒲の葉であった。迎えたのは、髪的美しい若い妻と、髪の半白な用人である。

「お帰り遊ばせ」

衝立から壁に、太刀を手に持ち変えた主の影が大きく動いた。古い屋敷だった上に、安政の地震の時にまた、ひどくいたんだのだが、朝夕の掃除が行きとどいて天井が低くて、陰気ななりに美しく見えるのは、この屋敷の家風だと見える。雇人が外へ行つて、年寄がいるからやかましいところばすくらい風儀の正しい屋敷である。天気の良い日に、この屋敷の前を通ると、主を役所へ送つて帰つて来た中間が、大きな乳鉈うづを打った門を水を使って根よく洗っている。永年洗い出されて木目の渦巻が鉄線のように固く描き出されている扉だった。二年ばかり前までは、この門を潜つて役所に出るのは、肩幅の広い大きな体格の老人だったが、今は養子の代になっている。子供がなくて他家から養子したのに、間もなく嫁を取つて、老人は今も隠居している。今もいったとおり、厳格で静かな家庭であつた。

当主の三沢半之丞は、居間へ入つて、羽織を脱ぎ袴はかまを脱いだ。「降りそうで降らなかつたな」

と、若い妻に、おだやかに話掛けた。

「父上は、まだ、お目醒めになつていられるか」

「はい、さきほどまで御書見になつておいでで御座いましたが」
夫は領なずいて見せ、

「では、御挨拶に伺おう」

妻は羽織を畳んでいると、

「誰も見えなかつたか？ 雪」

何かしら夫の語氣に、客が来るのを期待していたように聞こえたので、妻のお雪は目をあげて見返つた。

「どなたも……お見えで御座いませんでした」

足袋をはき更えて、半之丞は、黙つて坐つて茶を飲んだ。何か屈託のあるらしい様子が顔色に現れていた。二十四歳だったが、ここの隠居に見込まれただけあつて剣道の方は名譽を人に知られてゐた。

床の間の水盤に新しく花菖蒲いよもぎが生けてある。剪り立てのせいか、花の色が、紫とはこんなきれいな色だったかと思われるくらい、いきいきとして芽めえていた。半之丞は、茶を飲みながら、それを眺めていたのだが、

「雪」と妻を呼んで、急に声をひくくして、いった。

「父上から何もお話がなかつたかな」

夫の語氣にも、顔色にも、いつもと違うものがある。お雪は片手を畳に置いたまま、

「何も……」

半之丞は、その返事を聞いてから、

「お前の耳にも入れて置いた方がいいと思うのだが……」と静かにいった。

「今日、青江の兄さんが帰って来られた筈なのだ」

二

微かな動揺であつたが、これを聞いた時、お雪の白い顔に渡つた影がある。

「金五郎さまが！」

半之丞は顎をひいて頷ずきながら答えた。

「御赦免になつて、確か今日、永代へ舟が着いた筈だ」

夫婦の者は、暫く双方とも沈黙した。青江金五郎というのは、この屋敷の隠居の実子だつた。普通ならば、半之丞を養子にしないで、この家の跡を取るのが当然の地位にある青年だつたからである。

「お父さまにお話なさいましたか」

「話した。取合うなど仰有る」

「取合うなど仰有いまして……私どもと致しましては」

と、お雪は遠いものを見詰めるように瞳を見据えた。その顔付は冷たかつたが、膝の上に置いた小さい手が不安の心を示して落着がなかつた。

半之丞は無骨に、さっぱりといった。

「俺もそう思う」

「……………」

「御」徹な御気性で、あれは赤の他人だ、構うなど仰有る。一本槍だ。実は、俺だけでも義理があるから迎えに行かなければならぬと思つた。そんなことを言い出したら、どんなお叱りを受けるかも知れぬような御権幕だ。金五郎のことは私が処置する、お前たちから何も言うことはない。頭から、きびしく仰有る」

半之丞は、苦笑いして、床の花菖蒲を眺めた。紫の花を囲んで、剣のように真直ぐに切つ立つた青い葉が工合よく配置してある。もとより若い妻の手すさびに依るものである。眺めていて夫は幸福なのだ。

「端から何か申上げますと、反つてお悪いのでは御座いますまいか。お父さまでも、お兄さまを憎いとは思召していらいっしやいますまい」

「それア親子のことだから……しかし、こういつては悪いが、どつちもどつちだな。兄さんの方も少し慎しんで下さるとよかつたのだが……争われぬものだ。片意地のところが、やはり血筋だ。父上に楯突いて、わざと身を持崩して了つたようなところがある。無論、もう、ああいう所まで行けば武士をお捨てになるつもりだろうが。……どうしたものだろうなあ。二年の間に、多少は変れたか？ おとなしく折れていて下さると有難いが。……まあ、お前はあまり心配せんでもよいことだが」

「あの……」

とお雪は、急に、おそわれたように目をあげて夫の顔を見まもつた。

「こちらに、お見えになることが御座いましょうか？」

半之丞は、

「さあ？」と首を傾げて、

「いや、私の不在中に見えられたら、役所の方へ廻って頂くように喜内から返事させるがよい」

「けれども、あまり、御様子などが宜しく御座いませんでしたら」

「お宿を伺って置け。後刻、こちらから、まかり出るとお答えするよりほかはない」

そういったばかりに、奥深く、隠居所の襖の開く音がしたので、夫婦の者は目を見合せた。老人の咳きの声が漏れ、廊下づたに足音が出て来ながら、

「雪」と呼んだ。

「半之丞は戻りましたか」

三

「青江金五郎です」取次に出て来た年寄にこう答えると、奥から主人の声が出た。

「誰？」

「手前……」

主人の永井采女は、自分から出て来て、怪しんだように見据えたが、

「ああ」と驚いて、

「何日？」

そう問いたししながら、奉公人が側で聞いているのに気がついたのだろう。

「まあ、上れ。そうだ、庭の方から廻ったら。今、門を開ける」やはり、この男だけは、居留守を使うようなこともなかったと、金五郎は嬉しかった。

相当の旗本で、立派な屋敷が麹町にあるのだが、読書好きの風流人で、実際にも変り者が多い。そういう性行のせいだろうか、お城向の受けはよくないと見え、永い間お役もつかず、人を大勢置いていた麹町の屋敷が持ち切れないとなると、世間ていにも構わず愛玩の道具の類や書物などを携えてこの手狭い深川の下屋敷へ来て住むことにした。麹町の屋敷には、留守番を置くだけのので、結局この主人は、三十にならない若きで、世間で出世する望みを絶つことに決めたらしいと、親戚仲間の評判は悪い。が、当人は安気なもので、隠れて小唄の稽古などを始め、夜更に生垣の外を通る者が、三味線の爪弾きの音など漏れるのを聞いて、これが旗本の屋敷なのに驚くのだが、当人は一向、構わずに、つましいながら勝手な暮らしをして、段々と世間から離れて行く傾きがある。

五月間の、若葉の匂いのねっとりした庭に、主が自分で雪洞をともし枝折戸を開けに出て来たのが見えた。門を抜きながら、

「意外な人が来たものだ」

淡泊な語気が、采女のものだった。それでいて、金五郎は胸を

動かされる。黙々としているが今の金五郎は人のなさけに餓えているからだ。もともと親戚の中で、素直な目で自分を見てくれたのはこの兄妹だけだったからだ。戸をあけると、

「お入り、……足もとが暗いから」

庭はかなり広く、深川が洲だった時分の名残かも知れないが、池まであった。雪洞の灯影は、楓の下枝に映り、苔のついた石を木蔭の闇の中に浮き上らせた。

「池の菖蒲が見頃なのだ」と、主はいう。

「そうだ、雪が今日、昼間来て、剪って行った……」

その名のひとだった。島にいる二年の間も金五郎は、夢にも忘れなかった。

「お雪さんもお変わりありませんか」

初めて、放った問いである。問うのに我ながら怯えていた。自分の罪を羞じ入る気持も、このひとの名の前に出た時が、一番深い。この屋敷を訪ねるのに躊躇を覚えたのも、そのせいである。若さにまかせて不身持になった過去を悔むのも、この名のひとを思う時である。

「随分……永かった。まるで……十年も二十年も経ったような気がします」

「ああ」と采女は気がついたように、

「そうか、君は知らなかったのか？ 雪は嫁に行ったよ。去年」

金五郎は、槌で頭を打たれたもののように闇の中に立ち止っていた。

四

地に釘着けになったようだ。主の采女はこれを知らない。縁から座敷に上ろうとして振返ると、その時は、金五郎も歩いて追着いて来た。

「上れ」と采女はいった。

もと、折々訪ねて来た時と同じただずまいの部屋が、金五郎の目の前に、行燈の柔かい光の中に浮き上った。壁にもたせて、本が崩れるばかりに積んである。床の軸にも見覚えがある。家の裏は田圃だ。風が蛙の声を吹き送って来る。障子に近い机の脇に坐って笑顔を向けた采女も、もとのままだ。

「苦勞したな、金五郎。……しかし、目出度かった」

「いろいろ、御心配をかけ……」

「丈夫そうになった。しかし……」

煙管を煙草盆の火に近寄せながら、ちらと悪戯そうに上を向いて、軽きうった。

「もう、乱暴なことは、よせ」

無言でいたが、厚意は肚にとおった。自分も悔いている過去を、こう簡単に赦してくれようとは思わなかったのである。金五郎は俯向いた。

「番町へ挨拶に行ったか？」

三沢半之丞の屋敷のことだ。金五郎の実の父親がいる。

「いや」と答えて首を振ったが、急に目を上げて、